

参考文献リスト(5-6気候変動による高山植生及び希少植物への影響調査)

No.	著者（公表年）、文献名、学術誌名、巻（号）、ページ	概要	URL
1	Higa, M., Nakao, K., Tsuyama, I., Nakazono, E., Yasuda, M., Matsui, T. and Tanaka, N. (2013) Indicator plant species selection for monitoring the impact of climate change based on prediction uncertainty. <i>Ecological indicators</i> , 29:307-315.	19種の山菜を対象として分布適地モデルによる温暖化の影響予測を行い、6種について将来の分布が著しく変化すると予測した。また、これらの6種は、このまま気温が上昇した場合に九州山地、中国山地、四国山地、中部及び東北の低海拔地で消失すると予測した。広域に分布するチシマザサは、気候変動による影響をモニタリングするにあたって最もよい指標になると結論づけた。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/awhswhs/5/1/5_41/_article/-char/ja
2	松井哲哉, 田中信行, 八木橋勉, 小南裕志, 津山幾太郎, 高橋潔 (2009) 温暖化にともなうブナ林の適域の変化予測と影響評価. <i>地球環境</i> , 14:165-174.	落葉広葉樹林の優占種であるブナの分布情報をもとに分布適地モデルを作成し、気候変動にともなうブナの分布適地の変化を予測した。	
3	Nakao, K., Matsui, T., Horikawa, M., Tsuyama, I. and Tanaka, N. (2011) Assessing the impact of land use and climate change on the evergreen broad-leaved species of <i>Quercus acuta</i> in Japan. <i>Plant Ecology</i> , 212:229-243.	照葉樹林の優占種であるアカガシの分布情報をもとに分布適地モデルを作成し、気候変動にともなうアカガシの分布適地の変化を予測した。	https://link.springer.com/article/10.1007/s11258-010-9817-7
4	Ohashi, H., Kominami, Y., Higa, M., Koide, D., Nakao, K., Tsuyama, I., Matsui, T., and Tanaka, N. (2016) Land abandonment and changes in snow cover period accelerate range expansions of sika deer. <i>Ecology and Evolution</i> , 6:7763-7775.	積雪期間、土地利用形態（森林率、農地比率、市街地率）、地形条件などの環境・社会的要因とニホンジカの分布との関係についてモデルを作成し、土地利用の変化（耕作放棄等）と積雪期間の減少がニホンジカの分布拡大を加速させることを明らかにした。	https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1002/ece3.2514
5	Tsuyama, I., Horikawa, M., Nakao, K., Matsui, T., Kominami, Y. and Tanaka, N. (2012) Factors determining the distribution of a keystone understory taxon, dwarf bamboo of the section <i>Crassinodi</i> , on a national scale: application to impact assessment of climate change in Japan. <i>Journal of Forest Research</i> , 17:137-148.	日本におけるササ類（チマキザサ節）の潜在的な分布域を予測し、気候変動による影響を評価した。	https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1002/ece3.2514
6	前田綾子 (2011) 絶滅危惧種ムカゴサイシンの保全のために、ふるさとの植物を守ろう 植物園と市民で進める生物多様性保全ニュース, 734. 社団法人日本植物園協会.	環境省の生息域外保全モデル事業によって取り組んだムカゴサイシン（ラン科）の人工栽培方法について、取り組みの概要を報告している。報告では、当植物の生態に関する情報として、ほとんどの個体が自家受粉すること、球茎で栄養繁殖しているため個体群の遺伝的多様性が低いこと、球茎の寿命が非常に短いことなどが明らかとされている。また、人工栽培法については、いくつかの手法を試したが手法の確立に至っていないことが記載されている。	http://www.syokubutsuen-kyokai.jp/business/dl_files/hozen_news_07.pdf